

---

# **永遠は刹那のなかに 第四部**

忍者猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠は刹那のなかに 第四部

### 【Zコード】

Z2383P

### 【作者名】

忍者猫

### 【あらすじ】

五年前の世界、それも同盟にタイムスリップしたミッターマイヤーの物語。

コンセプトは、『銀英伝版紺碧の艦隊』。

いや、あんな奇想天外兵器は出しませんが、奇想天外親父はいます。

後、隙間を埋める為、色々人員を補充しています。

この話は、『神々の黄昏』作戦頃の話が中心になります。

## 1・動乱への間奏曲

ミッターマイヤーのもたらした波紋は、歴史の流れを微かに、しかし確実に変えようとしていた。

「ちょーっと、あざと過ぎる氣もあるが、まあこれが駆け引きってもんなんだうつな」

士官食堂で、ボロディン氏の演説を聞いていたオリビエ・ポプランの感想である。

うひやひやと笑いつつ、しかし微妙な表情を浮かべる腐れ縁の相手を、クロスワードに没頭していると思われたイワン・コーネフがいなしに掛かる。

「お前さんの口から、『駆け引き』なんて言葉が出ようとはね」「いやいや、恋愛に置いて駆け引きはだな」

「こいつも失敗するもの、だろう?」

さらりと切り返され、ポプランは又パズルに没頭するかに見える悪友に噛み付いた。

「待てこり、コーネフ」

それをさらりと交わし、すたすたとコーネフは食堂を後にする。

その後をぎゃんぎゃん喚きながらポプランが追い駆ける。

ベースコンビの掛け合いで漫才は、留まる所を知らぬよつだつた。

自由惑星同盟にて、エルウイン・ヨーゼフ一世が（全く自己に関わらぬ理由で）正統政府なるものを立ち上げるのは八月も半ば過ぎの事である。

尤も、その情報はドーソン大将の努力に関わらず、未確認情報として、日々と巷に流れていだが。

しかし、それをセンセーショナルに取り上げるマスコミは皆無で、ただ一人、

『それが事実なら、彼を為政者としてではなく、一個人の亡命者として受け入れるべきだ』と、訴える者がいた。尤も、皆聞き流してしまっていたのだが。

「他人の、正気を疑う瞬間と言うものが有る事を、再確認させられたな。ルドルフに正気など期待した覚えなど無いが、毎度毎度呆れさせてくれるものだ」

帝国暦488年11月、新無憂宮ノイエサンスーシを視察するラインハルト・フォン・ローエングラム公爵の眩きである。

彼の後ろには、新たに組織された親衛隊と、首席秘書官となつたヒルデガルド・フォン・マリーンドルフ伯爵令嬢が続く。

60平方kmの敷地に、五万人の侍従、女官があり、宮殿内に工スカレーター やベルトウェイが無いと言つ概要は知つていたし、一部の例外を除いてほぼ全ての建築物が宮殿に倣い、地階から地上に上がるものを持めて工レベーターの存在が無い事も知つていた。が、五万人の侍従、女官達も貴族から選出された為に『彼らの為の使人』が、一人あたり多数存在し、その為の居住区画まで存在する事を知つた時、流石のラインハルトも嘲笑を通り越して、ただ呆れ返るしかなかつた。

『そう言えば、姉上から聞いたな。貴婦人達は靴の華奢な構造から、三階以上の建築物に上るのは苦痛であり、「御下命無き限り上階に上がらない」と言うマナーすらあると』

ラインハルトは、スラックス姿の伯爵令嬢を見る。

若き提督達の早足に充分付いてこれる彼女に、自然好意の表情で問うて見た。

「フロイライン、何の為にここまで人力による必然があつたものかな？」

別に、あの同盟の『アルテミスの首飾り』何ぞと言ひ馬鹿馬鹿しいものを備えると言ふ訳ではない。

極真つ当な防護システムと、整合性の取れた人材配置があれば、あそこまで赤子の手を捻るが如く制圧は出来えなかつた。もう一幕あつて然るべきだつたろうに、と。

キルヒアイス提督の進言もあつて、首席秘書官として辣腕を振るう事となつたマリーンドルフ家の麗しい令嬢は、涼やかな声で返答した。

「おそらく、銀河全土が絶対権力の下、『叛乱を起しえない』と言つ前提において造られたが故と思われます、閣下」

「砂の城か」

ラインハルトは、今度こそ冷笑した。何が『弱者必衰』か、成り上がつて得た権力に胡座を搔いていただけではないか。

この時点では、ラインハルトの新無憂宮への興味は完全に失せて見えた。好奇心を持つ価値すらないと思つたようだつた。

「ルドルフのアナクロ趣味に、付き合つてやる謂れなど無い」

そう言つていた彼が、新無憂宮の一部改装と警備システムの機械化を命じたのは、数ヶ月後の帝国暦489年6月の事であった。

視察直後の帝都全土に及んだ人災と、それによつて起きたキルヒアイス提督の長期療養、そしてガイエスブルグによる遠征の失敗と続いた為に、そんな足元の事に気を廻す余裕が無かつたのだと皆思つていた。

確かに、新無憂宮の事はそれまでラインハルトの意識からすっぱりと抜け落ちていた。

仕事を半分、肩代わりしてくれていた親友の不在が彼をして職務に忙殺していたのは確かである。だが、同時に彼に新無憂宮の住人に対する悪感情をわざわざ掻き立てた者がいたのも事実である。

それが、彼の登極と同時に帝国を逃げ出した反ローエングラム派

の貴族達であり、そして同盟潰しを決めたアドリアン・ルビンスキーラフュザーンの策謀家達である。

ケスラーから密告に付いての報告を受けた時、仕事仕事でさかべっていたラインハルトに、今まで忘れていた「ゴールデンバウム」と言う存在に対する不快感が、一度に吹き上がつたのである。

そう、特に今も玉座に乳母に抱かれてでなければ座れないあの子供の事を考えた時、ラインハルトの心理状態はけしていい方向には向きてなかつたのだ。

何しろお飾りとは言え皇帝、そして権力の篡奪者と見られるラインハルトの預かり知らぬ場所で彼が怪我を（あまつさえ死んだり）した場合、喰えそれが空から降つてきた隕石の所為であつたとしても、総ての非難はラインハルトに向けられるのだ。

『わざわざ引き取つて、面倒を見ようと言つ殊勝な奴らがいるのだ、それに渡して何が悪い』

戦略家として、次の戦いの為の布石とする半面で、ロイエンタール相手に身に付けてしまつた急け癖が、頭を擡げた瞬間でもあつたのかもしれない。

わざわざ手を匂くしてエルワイン・ヨーゼフ一世を退位させるのではなく、勝手に玉座から持ち去られるのを待とうと言つ気になつたのだ。

とにかく、ラインハルトは幼帝誘拐と言う貴族達の蛮勇を、人知れぬ場所で諸手を上げて迎え入れようとしていた。

但し、その上でラインハルトはケスラーとモルト中将とに、新無憂宮に機械式の監視システムを取り付ける為の準備を命じた。

「新無憂宮に、今更往時のような兵团を配置するつもりは更々無い。そうである以上、必要な場所を機械で補えば問題なからう。フロイライン、信用出来る業者、いやシルヴァーベルヒがいたな」  
マリーンドルフ伯爵令嬢にそう命じながら、その位は搔い潜る才覚は求めて良い筈と、ラインハルトは本氣で思つていたのである。

結果から言ひうなら、幼帝はそれぞれの希望通り新無憂宮から連れ去られた。

フェザーン側からの情報を得て、慌てるランズベルク伯を連れてレオポルド・シューマッハはその夜の内に行動を起したのだ。

又、ケスラーとモルト中将とは、それぞれ機械導入の為の勉強会と警備兵の再編の為に宮殿から出払う形となり、迅速な行動に移れなかつた事も侵入者に有利に働いた。

事件直後、先に戻つて来たのはモルト中将の方であつたが、ジキスムント帝の像を触つて良いかと問う憲兵達に絶句してしまう。

又、何とか像を動かし、地下道を追跡したものシューマッハの仕掛けたブービートラップによつて、多くの負傷者を出してしまつたのである。

相次ぐ不祥事に、自決の覚悟と共に報告に来たモルトに向かつて、ラインハルトは秀麗な顔に幾ばくかの苦笑を浮かべてこう告げた。

「私の命令による任務中の事件である事、そして先に憲兵に対して、下らないかつての慣習や命令を撤廃していなかつた私の非だ、中将ばかりが責を感じる必要は無い」

「しかし」

昔気質の軍人であるモルトに、ならばとラインハルトは命令を下した。

「それでは、卿に命じる。

新無憂宮の地下道の全調査と、監視システム設置の総指揮を取るようだ。」

確かに、陛下を誘拐されるなどと言つるのは言語道断の事態だが、それもこれも時代遅れも甚だしい、新無憂宮のアナログ趣味の招いた事態だ。その改善をもつて、失態を回復せよ。良いな」

……流石に、半分は自分の望んで引き起こした事態であったがために、そのどちらで眞面目な人間を自殺させる事はラインハルトにも気が引けた。

何より、それで療養中のキルヒアイスに叱られる事を、無意識の内に避けようとしていたのかもしれない。

オーベルシュタインは、そんなラインハルトの行動に幾ばくかの非難の視線を向けた。

あまりにもどつちつかずの行動に思えたのである。

だが、そんなものにラインハルトは田もくれず、新たな戦いにのみ向かい合おうとしていた。

「取り敢えず、これからどうするんだい？」

声だけの相手は、事も無げに応えた。

『そりや、これからは喧伝して欲しいのぞ、ローハングラム公がフェザーンから侵攻するつもりだとな』

「おいおい、まさか」

『そのまさかがあるかもしれないってのを、言つて欲しいのぞ。何、信じて貰えなくともいいんだ。それを耳にした奴がいるって言うのが重要なんだ。どうも、フェザーンから洒落にならないものが押し付けられそうだからな、ちびつとでも手を打つとかなきや、後々困るのはこっちだ』

千里眼宣しくそう言つた相手に、取り敢えず渋つて見せる。

「だが、そんな事公共放送で流せるのか？」

『まあ、どんどん打ち切られるだろうが、その為にお前さんのブレーンにパトリック・アッテンボローって言つづ男を入れたんだ。大丈夫、上手くやるだろ!』

「……お前さん」

ほとほと疲れたと嘆息するこちら、「時間がない」とばかりに切り上げに掛かった。

『取り越し苦労つてんならいいだ。まあ、取り敢えず宣しく頼む』特殊回線を切ると、ボロディン新代議士は深々と息を吐いた。彼の黒幕は、色々と手を打っているらしい。

尤も、本来ならここでうんざりと溜め息を付いているのは某居眠り提督だつたらしいのだが、彼には向かぬと黒幕側で早々に切り替えてしまつたらしい。

とにかく、下手な戦場よりも大変な計略を託され、ボロティンはデスクから立つた。

時間は有限で、しかも逃げ足が速いと来ていた。

## 2・角笛は吹かれる

演説会から二日後。

イゼルローン要塞内の、民需用超空間通信局のベースの一つで、  
とある父子喧嘩が繰り広げられている。

「何やつてんだ、親父っ！」

ダステイ・アッテンボローは、大枚叩いてハイネセンへと通信回  
線を開いていた。

ここで、軍用回線を使わなのが彼の良識と言つか、両親の教育  
の成果であろう。

さて、この息子を世に出す片棒を担いだ男は、一呼吸置いてにか  
りと笑った。一呼吸ずれるのは、超空間通信のタイムラグの所為で  
ある。

流石に、民需用は軍需通信より回線に無理があるのか、どうして  
も遅れるのである。軍需用の回線に、民需用の回線が何割か押され  
ているのかもしれない。

『決まっている、楽しい事だ』

「何考えているんだよ、あんたは！」

息子の叫びに、又一呼吸置いて父親は楽しそうに歯を見せた。

パトリック・アッテンボローはそんな男である。

『それは秘密だ。お前は頑張つて革命じっこをやつてくれ。俺は楽  
しく政治ゲリラをやる。じゃあ、金が勿体ないから切るからな』

『俺の金だらうつ！ 畜生、くそ親父っ！ 俺に隠れて楽しそうな  
事やりやがつてっ！』

この子にしてこの父ありと言つべきか、アッテンボロー家の嵐は  
始まつたばかりのようである。

『ア・トリューニヒト』によつて、幼帝エルウイン・ヨーゼフ一世の亡命と彼を元首とする『銀河帝国正統政府』なる有名無実の政府が立てられた事が公表された。

その時、野党席から激しくそれに対して『否』を叫んだ者がいた。誰であろう、ジエラルド・ボロディン新代議士である。

「そんな馬鹿げた事があるかっ！ それなら何故、あくまで一個の亡命者として扱わないつ！」

将官に上り詰めた男は、かつて艦隊を指揮したその肺活量を持つて、戸惑いつつも安易なお祝いムードにある議場全体を一喝した。「大体、七つかそこらの子供が、自主的に亡命なぞ求めるものかっ！ 周囲の貴族達の思惑によつて、この自由惑星同盟へ『拉致』されて来たに決まっているっ！ それではローエングラム公に口実を与えるだけではないかっ！」

周囲の、トリューニヒト派の議員達がボロディン氏を押さえ込もうとし、テレビクルーの「カットしろ」と囁つ声が漏れる。

そして、フレームアウトきつきのところで、ボロディン氏の叫びが響いた。

「いいか、イゼルローンにはヤンがいるが、フェザーンから帝国が来たら打つ手が無いぞ！ ローエングラム公が、フェザーンをそのままにしている筈は無いんだからなっ！！」

その直後、中継は一時中断し、五分後に何事も無かつたように再開され、トリューニヒト議長の満艦飾の美辞麗句が並べ立てられた。

遠くイゼルローン要塞で中継を見ていたヤン艦隊の人々は、呆然と呆氣と怒りと失望、そして緊張とを大鍋に突っ込んで煮込むような状態にあつた。

その中で、ウォルフガング・ミッターマイヤーは中断直前のボロディンの叫びに、雷に打たれたようになつていった。

あの満席の議場の中、ローエングラム公の行動を看破した者がい

る。しかもたつた一人、それも本来なら死んでいた筈の人物。つまり。

「ミッターマイヤー少将、顔色が悪いぞ、大丈夫か？」

「あ、いえ、大丈夫です」

声を掛けて来た要塞防衛指揮官にそう答え、ミッターマイヤーはそっと汗を拭つた。

「多分、禿げの黒狐ルビンスキーが演出協力なんでしょうけど、要するにあの禿げ、帝国と手を組んだって事ですかね？」

その横で、これはかなり憮然としているガウェイン・クラスター少尉が頭を搔く。同盟の学校に進む為に一応戸籍を移したもの、彼はフェザーン出身である。

「クラスター少尉、どう言う意味ですか？」

皆に飲み物を配りながらのコリアン・ミンツ准尉の問いに、紙コップを受け取りながらガウェインはばつさりと言い切つた。

「帝国と同盟を秤に乗せたら、帝国の方が投機先として魅力的つて事。フェザーンは商人の星だからね、今まで通り双方に金を撒くより帝国に肩入れして同盟を潰して、赤字を帳消しにしようって考えてるんじゃないかな」

少年の辛辣な物言いに、ヤン・ウェンリーは特に異論を挟まなかつた。

その直後に、もつと深刻な発言がモニターからぶち込まれた為である。

ヤン艦隊から見て、所謂『砂の楼閣』であるところの『銀河帝国正統政府首相』なる存在は、軍務尚書としてウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツゲストードミラル提督の名を挙げたのだ。

無論、全くの事後承諾で、しかも既に同盟政府側が了承している以上、メルカツ提督が辞退する事は不可能な状況にあつた。

不信の目を拭うように、ヤンは頭を搔いた。

「私がレムシャイド伯とやらでも、確かにメルカツ提督を軍務尚

書に押すがね

「同感ですね」

「しかし、そうなればメルカツツ提督は、イゼルローンを離れなければならなくなる。彼らは提督が皇帝の側に、いや自分達の側にいるなど認めないでしょ?」

頷くショーンコップに続けて、「これは些かうざりした口調で」「ミッターマイヤーは眩いた。

不可解そうに視線を向ける周囲に、ミッターマイヤーはこれまでの向こう側での経験を基に説明する。

「ざつと見たところ、閣僚の中に軍人経験者はいません。彼らは、將帥さえいれば兵士は沸いて出るとでも思っているでしょう。貴族領では、領主の命令で領民を徴兵出来ますから。ですから、最終的な自分達の守りとして、メルカツツ提督を自分達の側に呼び寄せたいと思つていい筈です」

この言葉に、ムライ少将やダスティ・アッテンボロー少将が鼻白む。

ワルター・フォン・ショーンコップは、やれやれと気障に肩を竦めて見せた。

「他力本願も、ここまで来ると清々しい」

「だったら、いつその事ショーンコップ少将とミッターマイヤー少将も呼べばいいでしょうに。薔薇の騎士連隊ローザンリッタに守つて貰えば、下手なシェルターに入るより安全なんじや有りませんか?」

飲み干した紙コップを弄びつつ、投げ槍にガウェインがそう言つと、ぶつとあちこちから笑いが漏れた。

ショーンコップはがさあとガウェインの頭を撫でたが、ミッターマイヤーの方は生真面目に困った顔になつて、二十歳にもなつていない副官を見た。

「私は平民だからね。ショーンコップ少将ならともかく、彼らの思考の外にいるよ、私の事は」

「……いえ、そんな真面目に答えてもらつと、ちょっと」

ガウエインが頬を搔く横で、アッテンボローが別の話を始める。

寧ろ、こちらの方が懸案だらう。

「こうして、派手に花火を揚げた以上、帝国からも当然の返礼が来ますね」

その答えは、ほんの数時間後、夕食を摂り終えた人々の前に突き付けられるのである。

何とは無く帰りそびれたミッターマイヤーは、そのまま分艦隊長事務室で書類の整理をしていた。

いや、正確を期すなら書類整理をしつつ、ぼんやりと思考の海にたゆたっていた。

「……は、否ローハングラム公は、フェザーン侵攻を行うだらう」覆しようの無い事実として、ミッターマイヤーは確信していた。確かにあの時と事情は違う。国力こそ劣るもの、同盟にはヤン以外の人材も残っている。

だが、彼の人の気性として、あの停滞を嫌う霸王が、歩みを止める理由を思い付かないのだ。

ジークフリード・キルヒアイスは健在だが、まだ病床にあると言う。

あの時と同じに展開するとは思えないが、同時により状況が悪くなるのではないかと言う懸念がある。

客観視するようになつて、更に目に付くようになつたせつかちな『オーベルシュタイン』の方法論と、何よりフェザーンの存在である。

フェザーン、地球教、その極彩色に彩られた禍々しい響きに、ミッターマイヤーの表情は自然不快に染まる。

「いっそ、フェザーンに行つて見るか」

自然に口から漏れた咳きに、苦笑と共に頭を振った。

侵攻となれば、おそらく牽制と陽動の為にイゼルローンに攻勢が

掛けられる。

その時、その指揮を取るのは親友ロイエンタールの筈である。  
ならばこそ、慣れないフェザーンの調査より、イゼルローン要塞で戦闘に参加する方がよほど役立つだろ。」

しかし、病巣が判つてゐるのに、手が打てぬ歯痒さといつたら！

「フェザーンですか？」

不意の声に顔を揚げると、コーヒーを運んで来てくれたらしいガウェインの姿があつた。

同盟でも非常に珍しい、朱金にも見える金茶の瞳の少年は、コーヒーと軽焼き菓子の皿を置くとミッターマイヤーに向直つた。

「何か、あるんですね」

ミッターマイヤーは年若い

そして同じよつに本来と違つ

時間帯で生きる副官に向かつて、必死に言葉を選んだ。

「 ガウェイン、種を撒いて芽吹くまで、時間が掛かる

」「ええ

らしくない物言いだが、ガウェインはその続きを黙つて待つた。

「芽吹く前、種の段階で止めたいと言つのは、きっと無茶な話なん

だろうね」

「フェザーン侵攻、じゃあありませんね。その話

ミッターマイヤーは不可思議そうに顔を上げた。

ガウェインの方は、実はその話の為にコーヒーを口実に来たのである。

「最近アングラで、飛び交つてゐる情報が有るんです。『帝国はフェザーン経由で同盟侵攻を日論んでいる』って」

その言葉にはつとなる。

そう、前よりも人材が、国力が残つてゐる。

ならば情報収集力も比較すればずつと高い筈なのです。事実に苦笑し、頭を搔くミッターマイヤーにガウェインは言葉を続けた。

「……笑い話だと思いますか？」

「いや、実際そなんだ。」

ローエングラム公は、フェザー

ンに侵攻するつもりだ。その為に……」「

ふつと、意識の底で繋がる単語。

エルワイン・ヨーゼフ、フェザーン、そしてローハングラム公。

あの当時、全く気にもしなかった事が今判る。

そして、ルビンスキーが、地球教が、何を狙っているのか。

そもそも、キルヒアイスの重症が、奴らの策謀の結果ではないと言つ

り立てるに、保証は何処にも無い。

では?

「ミッターマイヤー少将?」「

「ガウェイン、ヤン司令官は?」

椅子を蹴るなり、ミッターマイヤーはそう叫んでいた。

『森林公園の作戦会議』と、後にガウェインに揶揄られたものであるが、ミッターマイヤーは公園のベンチでまどろんでいた要塞司令官を捕まえた。

まだ眠たげなヤン・ウェンリーに、先程のガウェインが拾つて来た情報を話したのだ。

「この情報が同盟で広がつていると言つ事は、フェザーンにも流れていると言つ事ですよね?」

「いや

だが、ヤンは喰い付かない。

「…………どうだろうな。寧ろ、同盟国内から出た氣がする」

「なら、まだ打つ手は残つてゐんじゃ有りませんか?!」

ヤン・ウェンリーは静かに、鋼色のミッターマイヤーの目を見詰め返す。

帝国人の屍山血河によつて築かれた『不敗』の名を持つ男の、宇宙の闇の如き黒い目。

「そこまでは、私の権限じゃないよ

「ヤン司令つ!」

「ミッターマイヤー 提督」

根負けしたかのように口を開いた黒髪の魔術師は、言葉を捜しているようだつた。

「本星から、近々人事の再編成 受けている。多分、フェザーンに行く人間も出るだろう。下準備が必要だね」

「はいっ！」

詳しい事はキャゼルヌ事務監にとの言葉に、『疾風』の名に相応しく走り去るミッターマイヤーと、一礼して彼を追うガウェインとを見送りヤンは溜め息を吐いた。

やれやれ、『鬼門』と言うものはあるらしい。  
せずに済むなら息もしたくないと言つのに、仕事をさせたがる人間の何と多いことか。

そう、ミッターマイヤーは再びヤン・ウェンリーの尻を叩く事に成功したのである。

そして、ラインハルト・フォン・ローエングラムによる『宣戦布告』は、その直後に叩き付けられた。

『誤った選択は、正しい懲罰によつてこそ矯正されるべきである』

この言葉を、銀河の半分の大多数は恐怖と共に、ある者は失笑と共に、そして、ほんの一握りの人間は不退転の覚悟と共に聞いたのである。

それだけでも十分過ぎるのに、そこに持つて来て、同盟首都星から小さいながらもう一つ爆弾が投げ込まれた。

コリアン・ミンツの少尉昇進と、フェザーン駐留武官への転属命

令が届いたのである。

ヤン提督の生活能力を知る一部から、『ヨブ・トリューイヒトに依るヤンウェンリー謀殺』とまで騒がれたその辞令に、一度は「嫌だ」と騒いだコリアンだったが、ヤンからの説得と『頼み』を受けた、渋々ながらも受諾した。

そのコリアンに、ガウェインは一枚のメモを渡した。  
そこには、彼<sup>コリアン</sup>には読めない妙な一綴りの文字と、住所<sup>アドレス</sup>と名前が書かれていた。

「リ、シュー、イン？　これは？」

「昔、フェザーンに居た時に暮らしていた、集合住宅<sup>フラット</sup>の大家さんなんだ。元惑星警察の警部さんで、親族にも現職警官が『じろじろ』してゐる人でね、昔の付き合いで割りと裏世界にも顔の利く人だから、物を盗まれたり、最悪夜逃げしなくなったら頼るといいよ？」ガウ仔<sup>チャイ</sup>の知り合い』って言つたら、少しほう遇してくれることだから」

そう言つた後、くすつと笑つてガウェインは言い足した。

「厳しい顔してゐるし、軍人には厳しい反応をすると思うけど、大丈夫、正義感が強いだけだから。ヤン司令と御先祖が同じ国の出身なんだ、平氣だからね？」

その言葉に送られて、コリアンは『銀河帝国正統政府<sup>ハイネセイ</sup>』に出向するメルカツツ、シュナイダーと共に首都星に向かつた。

宇宙暦七九八年、九月一日の事である。

### 3・狼の歩く道

話は、少しだけ時間を遡る。

ミシターマイヤーが踏み込むまで、実のところヤン・ウエンリーはある意味ストライキを起こしていたようなものであった。

あれは捕虜交換式典の時。

「ヤン・ウェンリーは、イゼルローン方面での敵の攻撃にさえ備えていれば良い。フェザーンに関心なぞ、越権行為に過ぎん」  
時間をやり繰りして（正確にはしてもらつて）、フェザーン経由によるスパイ潜入の可能性について統合作戦本部に言上した結果、したり顔の連中からそう跳ね付けられた。

挙句にそれが事実であつた事も、クーデター騒ぎで綺麗さっぱり忘れ去られたらしい。

さもなければ、あんなくそふざけた『査問会』なんぞ起こりようも無い。

「正面から行つても同じ事だよな。……いや、越権つてことは思い出すか」

しかも、一度フェザーンとなれば、内容無視で感情のこじればかりぶつけられよう。

「危険性が、言つてゐる奴に対する好悪で変わるなら、楽だらうなあ」

実際のところ、ヤンは安穩と寝こけている訳ではなかつた。

ただ、虫が来ない事を良い事に、ベンチの上でだらけて思考をルーティンさせていただけなのだ……らしい。

しかし、そんな不可侵且つ神聖な時間は、尻を叩きに来た帝国から來た虚心坦懐にして才幹と人間性まで兼ね備えた元将帥によって破られた。

樂園から追われた以上、行動を取らねばならない。が、

「向き不向きつてものが、あるんだけどなあ」

埒も無い事を呴いたヤンの表情が急変し、その直後、自然公園内にいた人々は、『我らが司令官』の猛ダッショと云つ、世にも珍しいものを目撃する事となつた。

『何で氣付かなかつたんだ、私つて奴は』

彼の呴きは、誰も聞く事が出来なかつたが。

九月に入る頃、帝国は来る大攻勢に向けて熱氣に包まれていた。帝国軍首脳部で囁かれる「一億人、一〇〇万隻体制」と云つ言葉は、日々現実味を帯びようとしていた。

ラインハルト・フォン・ローエングラムの発した『銀河帝国正統政府』と言つ道化と自由惑星同盟への『宣戦布告』が、軍籍に無い一般平民の若者を軍の徵募事務所に走らせていた。

彼の張つたフェザーンと同盟への罷は、同時に平民達を扇動する事にも成功していたのである。

そんな、来る戦場への昂揚感に包まれる高級士官クラブ『海鷺』（ゼー・アドラー）にオスカーフォン・ロイエンタールはいた。

彼に、数ヶ月前までの荒んだ空氣は無い。

特に今夜は、失調を取り戻そうとするが如く特に親しい同期のみならず、他提督や士官とも語らつてゐる。

元々、彼は軍人として尊敬されており、予想される大戦を前に高名な戦術家で名将の誉れ高い上官と話せる機会に士官達は胸躍らせ、同僚の大半は彼がこの来る戦いを前に、部下や仲間との親睦を求めていると信じた。

実際、彼は何時に無く満足げだつた。

……尤も、ワーレンなどはそれこそに不安を抱いたものだが。

『介在者がいる』

それが、ロイエンタールの出した結論だった。

彼は、論戦や親睦の為に『海鷺』に来た訳ではなかつた。この数ヶ月間の調査の、言わば最終検証の為であつた。

予想は誤る事無く、『ウォルフガング・ミッターマイヤー』は『氣の毒な亡くなつた有能な將官』または『名前だけは知つてゐる』にすり替わり、あの万人が忘れようもない『ガイエスブルグ元帥暗殺未遂事件』すら、微妙に変わつてゐる。

友との再びの別離以来、迷走する心を押さえ込み、本来の冷徹さで出来る限り、即ち合法非合法込みでの調査をし、今得た答え、それは。

『ここにいるほぼ全員の記憶は操作されている』

ロイエンタールは笑つた。

恐らく、自分が『氣付いた事』を知つた相手からのリアクションが来るだらう事を予想して、そして。

「悪い笑い方をしちゃいけませんよ」

ロイエンタールは、ゆつくりと振り返つた。

彼の背後、総て埋まつていた筈のボックス席に、一人座つている予想の相手に、いつそ魅力的に笑い掛けた。

「今夜会えると思っていた。望みが叶つて喜ばしい夜だ」

そして、『ヤン・ウェンリー』と名乗つた占い師の額に、隠し持つていた銃を突き付ける。

「俺は、忘れてはいない」

見縊みくびつて、記憶を取り除かなかつたと言つならお生憎な話だ。

宣戦布告をしてやるう。例え今ここで銃が効果無からうが、銃の引き金を引ける事こそ重要。

誰か判らぬ存在の思い通りになぞ、させる気は無い。

ロイエンタールの黒と青の炎の眼差しに、深遠のような黒が交差する。

眩しげに目を反らしたのは、占い師の方だった。

「知つた方が後悔するかもしませんよ?」

「上等だ」

かちりと、安全装置を外す。

俺は絶望を見た。

あれより、絶望する事など有り得ない。

友の血に染まつた部屋、彼の自分の為の絶叫、たつた一瞬笑つたまま

……胸が痛い。焼け付くよつこ。

思い返すロイエンタールに、深淵の果てから声が告げる。

「それが、力」

「?!」

占い師は、彼の胸を指差す。真つ直ぐに心臓を。

「その炎こそ、彼の力になる」

「『彼』だと?」

「破滅を食い止めようとする、ミッターマイヤーさんの「

予想外であつたにも拘らず、ロイエンタールは困惑しなかつた。寧ろ、今まで目を背け続けていた事を突き付けられた氣さえした。合理主義者である彼には、謎めいた言い回しは不快だったものの、合理主義者であるだけに、ここまでくれば気付かずにはいられない。

填まつて行くピース。

ミッターマイヤーの眼差し、あれは目的があつての事。では。

「お前は、卿は、ミッターマイヤーの為に行動しているのか?」

銃を外す事無く問うロイエンタールに、占い師はいつそにこやかに答えて曰く。

「いいえ、違いますよ」

「今更韜晦する氣か?」

「今更韜晦する氣か?」

睨み付ける美丈夫に、四〇絡みの東洋人はゆっくりと頭を振った。

「私は、私の願いの為に」

脳裏に浮かぶのは、公共放送に流れる姿ではなく、最後に別れた時のあの幼い姿。

紅葉の手を伸ばして、自分の後ろを付いて歩いた種違いの弟。

そう、皇帝と言ひ名の男が抱え込んだ凍えた炎と、  
貴方のロイエンタールかつての捻れた炎に巻かれて、

未来を奪われてしまう筈の『弟』の為に。

その言葉は、口にこじり出されなかつた。

しかしその怒氣と哀しみは、ロイエンタールに違えずその本質を伝えた。

その言葉に『嘘』は無いと。

「ああ、そろそろフェザーンに行かなくては」

そう言つて、占い師は銃に頓着する事無く立ち上がつた。

その後ろに、見た事もない、朱塗りのオリエンタル趣味の扉が見える。

その後姿に向かつて、銃をぶつ放そうとしたロイエンタールはその次の瞬間、

「おい、大丈夫かっ！」

聞き慣れた大声と共に、容赦無く揺すぶられ、ロイエンタールは眉を顰めた。

「このつくらいで潰れちまつたのか？ 随分弱くなつたんじゃねえか？」

そう笑つた、オレンジ色の髪の同期の腕の時計に目をやり、ロイエンタールは改めて自分の腕時計を覗き込み、その表示ににやりと笑つた。

「ふつ 夢ではないと、言いたい訳か」

ビックテンフェルトと店の大時計の時間は午後11時3分。だが、

ロイエンタールの時計はまだ11時になつてはいなかつた。

結局、煙に撒かれた様なものであつたが、ロイエンタールの心は落ち着いていた。

ミッターマイヤー、お前の望む事を行つならそれでいい。

だが、俺も俺の望みを叶える。

お前を連れ戻し、そして

。

その頃、イゼルローン要塞はある種の緊張状態を維持している状態にあつた。

帝国

より端的に言つならローエングラム『公』からの

宣戦布告以来、ミッターマイヤーは活発にヤン司令官とダスティ・アッテンボロー少将の下に通つていた。

『布告』がある以上、陽動あれ何であれ、必ずローエングラム公はこちらに大軍を差し向けて来る。

その来る戦闘の為に、打てる手を打てるだけ打つ。その為だつた。

その日も、勤務時間を結構オーバーするほど会議が続いた。

「ああ、やつぱり。お腹空いてませんか、皆さん」

長くなるからと、先に帰るよつに言われていたガウェインがひょっこりと顔を出した。

なにやらふわりと、ミッターマイヤーには馴染みの薄い、しかし実に魅力的な香りを纏い付かせてだ。

その香りに、ヤン司令官が懐かしそうに顔を上げた。

「ほう、ピーマンと牛肉の細切り炒めだね」

「チンジャーロースーって言いましょうよ、提督。中華系なんだか

ら

そう言いながら、ガウェインは四種類の料理を手際良く、書類の片付いたテーブルの上に並べて行く。

チンジャーロースー、八宝菜、てんこ盛りのシユウマイ、そして肉団子の甘酢あんかけ。

どつさりとした量に呆然としているミッターマイヤーとアッテンボローに、紙皿と使い捨てフォークを差し出し、ガウェインは笑つた。

「おー人も味見してください。さつきグリーンヒル大尉と、シェーンコップ少将にも声掛けましたから」

暫くすると、二人と共に臭いを嗅ぎ付けたが、陸戦隊や空戦隊の何人かが紛れ込み、結構な人数になっていた。

「しかし、又何でこんなに？ わざわざ買って来たのかい？」

「いいえ、俺が作つたんですよ、ローゼンバンク中佐のフラットでキッチンと人手借りて」

肉団子を摘まみながらのカスパー・リンツの問いに、ガウェインがあつさりと答えた。

「ミンツ少尉に頼まれたんです、『ヤン司令官に食事を食べさせて欲しい』って。何時もキヤゼルヌ家に頼る訳にはいけないし、司令官殿は時々食事時間を忘れるからって」

その言葉に、色々な人間がそれぞれの理由で目を反らす。

当のヤン・ウェンリーはと黙つて、並べられた料理を食べつつ、微妙に悩んだ顔になつてゐる。

「ここのだけの話だが、妙に彼の口に馴染んだ味付けなのである。

「しかし、美味いね、このところとした野菜炒め。お前さんのお袋さん、料理上手い人だつたんだね」

そう言いながら、入一倍皿に取るオリビエ・ポプランの頭を、冷静にその相棒が叩く。

それに対し、ガウエインは些か困つたように頭を搔いた。

「まあ、母も料理上手でしたけど。これらの料理のレシピは、行きつけの図書館の司書先生に習つたんですよ」

「へえ、司書の先生？」

「俺、母一人子一人だから、母が仕事している間、ずっと近くの図書館で遊んでたんですよ。そしたら、その司書さんと仲良くなつて」

そう言いながら、皆に烏龍茶を配るガウエインに、思わず全員の目が集まる。

「そうか。苦労したんだな」

「みじみとリンツが言つと、けいらりと笑つてガウエインはこいつ言つた。

「苦労したのは母さんですよ。俺は、大家さんや近所の人にも可愛がつて貰つてましたから」

「そりやそりや」

あつれりとポプランが頷き、その場の何人かを残して「それもうだ」と黙つ顔になる。

そして、四つの皿が綺麗に空になると、自然にお開きとなつた。

「ま、それじゃあ続きは明日つて事で。ガウエイン、『駄走さん』

アッテンボローがそう言つて手を振る。

ヤン司令官はと言つと、グリーンヒル大尉とショーン・コラップだが、

両脇を抱えるようにして送つて行く。

陸戦隊と空戦隊の面々は、それぞれの目的の為に三々五々散つて行く。

そんな彼らの背中を、ミッターマイヤーは感慨と共に見送つた。ここに来て、やつと判つた事である。

ヤンが死んだ時にはおぼろげにしか判らなかつた事、自分達がどれだけ掛け替えの無いものを失つたのか。

陛下も、ロイエンタールもそして俺も、あの当時は尊敬すべき最強至強の敵と、それ以上の値打ちに気付いてはいなかつた。

今になつて判つた。『ヤン・ウンリー』（かれ）は宇宙をもう一方から支えていた、興味であり不思議であり、解り合いたいと思う相手だつた。

「この世に輝くものが一つだけではない」

と、彼の存在は何時も自分達に、意識にさえならないところで語り掛けていた。

彼の向こうにある何かに、何時の間にか敬意と可能性を感じていた。

じつら側に来て、ようやつと見えたヤン・ウンリーの背中の意味。

イゼルローンの人々は、決して勇猛果敢だつた訳ではない。

彼らは、俺達と違つて何を喪い、しなければならないか判つていたのだ。

ようやつと、胸に落ちた。

「ロイエンタール、俺はお前を敵に回したい訳じゃない。陛下を敵に廻したいのでも。俺は、ここにいる人達を」

そして君を、君等を。

田を閉じたミッターマイヤーの横顔を、横歩いていたガウェイ

ンはふと見上げた。

人工天体のホリゾントが作り出した夕闇の下、そこに立っていたのはそう、一つの大國の創業の重鎮こそ相応しかろう大人物に見えた。

リスクは負おう。

でも最小限にしてみせる。

それが、お前と戦う事なんだ、ロイエンタール。

#### 4・烈風（かぜ）は彼方へ

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年、九月一〇日。

ローエングラム公ライインハルトは、旧貴族勢力に拉致され、『銀河帝国正統政府』の首班となつたエルワイン・ヨーゼフ二世の廢位と、ペクニッジ子爵家の生後六ヶ月の乳児、カザリン・ケートヘンの即位を発表した。

彼女はゴールデンバウム朝の三八代目にして初めての女帝であり、そして最後の皇帝になる事はほぼ明白であった。

「帝位簫奪の、ステロな段取りですね」

帝国側から傍受した、民需放送のニュース映像を見ながらガウェイン・クラスター少尉が眉を顰める。

この時、ミッターマイヤー分艦隊は艦艇の定期検査の真っ只中で、分艦隊のオフィスに艦橋要員ブリッジカルトの女性陣が集まり、書類整理の手伝いをしていてくれた。

「はー、やっぱりあの綺麗な兄ちゃん、皇帝になる予定なんだ」

巻き毛とそばかすが印象的なアイリーン・サザーランド准尉が、身長こそ自分と余り変わらないものの年下である少尉を見る。

「ここで、もう一手間入れるか入れないかの差はありますけどね」ガウェインの言葉に、白金髪をベリー・ショートのオールバックにした長身の美人が応えた。彼女はアイリーンと共に砲撃士官を務める、デライラ・カラライト少尉である。

「THREE DYNASTY、三国志みたいだね」

「ツアオツアオあるネ」

その言葉に間髪入れずに続いたのは、オペレーターのチャン・リン曹長である。

彼女は、殊更中華系である事を強調するように、長い黒髪を二つのお団子に結い上げている。

それを、仲間達が何故と問うた時、彼女曰く、

「お婆から、『世間がお前に求めているのは、ステレオタイプの中  
国娘じゃつー』って、言われたもんだから」との事。……因みに、普段の『アル言葉』も、ステレオタイプの為  
らしい。

「何だい、そのパオパオつて」

眉を八の字にしたアイリーンに、金髪を肩までのボブカットにし  
た少尉の階級章を付けた女性が微笑んで応える。

彼女は、ペーオウルフ旗艦の主任オペレーターであるコーネリア・アダムス少  
尉だ。元々は一〇代で博士号を取った才媛ながら、教授陣のセクハ  
ラと妨害に耐え切れずに軍に飛び込んだ変り種である。似たような  
経緯で軍に入つたガウェインとは、良い学問仲間でいるらしい。

「三国志の英雄、曹孟徳よ。彼は群雄の中でも、かなり軽視される  
家柄の人間だつたけど、幼帝を手中に納めて権力を掌握し、三国の  
中でも尤も力のある国を立てる土台を造つたの」

「曹操と並べるのはどうかな?」

そう言つたのはガウェインだ。

「確かに曹操は戦争に強くて、政治家で、壮絶な人材コレクターだ  
つたらしいし群を抜いた存在だつたけど。でも彼はローエングラム  
公と違つて芸術家だつたし、何より自身は帝位篡奪はしなかつたん  
だ」

黙つて、女性陣の話に耳を傾けながら書類を作り続けていたミッ  
ターマイヤーは、ガウェインの言葉に顔を上げた。

ミッターマイヤーの代わりに、その言葉への質問をしたのは、ず  
つとファイリングをしていた索敵オペレーターのケリー・バートン  
軍曹だつた。

「え? だつて、彼が権力者になつたんじょ?」

「帝位に就いたのは、彼の息子。曹操本人は皇帝の一歩手前で登極  
を止めたんだ。名より実を選んだ、実に合理的な人だつた。

これは俺の解釈だけど、彼は帝位に就かないでいる事で、他の英  
雄……そう、孫權や劉備が即位する事を阻止していたんじやないか

な？一応彼らはその時の王朝に従う立場だったから、王朝が続いている間に自分の国を立てるなんて事出来なかつたんだと思う」「あり、劉玄徳が即位を宣言したら、人民は彼に流れたんじやないかしら？」

「一ネリアの言葉に、ガウェインは肩を竦めた。

「まあ、諸葛亮はそれを狙つたみたいだけど、彼本人がそれを出来なかつた。彼の本質は、任侠、義理人情に拘る性質だつたそうだから。だから部下を大切にしたし、義理の兄弟が殺された時、それまでの政策も軍略も捨てて復讐戦に走つちゃつたんだろうね」

「それで言うと、孫權の方はまだしもっと早く帝位に就いたんじやないかい？ 確か奴さんの地元は土豪の勢力が強かつたから、その気になればもっと早く独立していた気がするけどね」

そう、話に加わったのは、司令部からの書類を運んで来たヘルガ・ミュンツァー少佐だ。

一時期は陸戦部隊に所属していたと言う豪快な女性は、そんな経歴にそぐわぬスレンダーな体格と長い黒髪の、しかし目は鋭い美人である。その彼女に向かつて、ガウェインは首を横に振つて見せた。「そうでもありませんよ。土豪の勢力が強いから、まず彼らを取り纏める事から手を付けなきやいけなかつたんですよ。それに、群雄達は皇帝がいる間に即位する愚はよくよく知つてますよ。それやつて、こけた奴が同世代にいるんですから」

「袁術ね。確かに、伝国の玉璽と言つものを手に入れたからつて、皇帝に即位しちやつた人」

「ほんとに手に入れたのは孫堅スオンジアンで、彼の息子が軍勢を借りる質草として渡したのを、そのまま取つちやつた人アルね」

「一ネリアとリンが続けてそう言つと、デライラとアイリーンとは肩を竦めた。

そこに、他のメンバーと一緒に食事の準備をしていたマリエ・ローゼンバンク中佐が戻つて來た。三つのバスケットにサンドウイッチや鶏肉のから揚げ、カラフルなラップで包んだサラダやソーセー

ジがひとつ詰まつており、大きなポットにはたっぷりコーヒーも用意されている。

「あり、楽しそうね。取り敢えず皆、食事にしましょ。もうひとつ、お皿を過ぎているわ

「わ、艦長」

「戴きます！」

わつと集まる女の子達の間から、トレイにサンディッシュや色々を取り分けた中佐がミッターマイヤーの方に動いた。

「どうぞ閣下。奥様からの差し入れですわ」

「ありがとう」

ペンを置くと、ミッターマイヤーも取り敢えず一休みすることに決めた。

宇宙暦七九八年十一月、ウランフは墓地の片隅にいた。

そこには、まるで周囲から隠れるように、生け垣を廻らせた中に小さな墓石があった。

それは、昨年の救国軍事会議によるクーデターの首班であり、そして裏切り者と刺し違えようとして散ったドワイト・グリーンヒル大将の墓であった。

一人娘がイゼルローンに赴任したままであり、又クーデターの主犯格と言つ事もあり、墓地は最低限の管理しか行われていない様子だった。

その寂れた墓に、ウランフが何ゆえ詣でに来たのか、彼の護衛官達には見当も付かなかつた。

ただ、グリーンヒル氏の知人らしい、大柄な老婆と暫く立ち話をしていたらしいのだが。

……無論、その老婆の正体が、特殊メイクを駆使したボローティン氏であるとは、修練の足らない青一才達には知るべくも無かつたのであるが。

「……なんて所を指定して来るんだ、お前さんは」

周囲に洩れぬよう、声を響めるボローティンに向かって、ウランフはにやりと笑つて見せた。

「なあに、ちょっとしたジョークだ。お前さんと俺が、真正面から面付き合せていたらトリューニヒトに警戒されちまうが、敗死した元同僚の墓の前で、見知らぬ婆さんと話し込むんだったら問題無いだろうよ」

その言葉に、「だつたら自分が変装しろよ」と言いたかったものの、身長一メートル近いこの男にさせたら怖いだけだと、自分を納得させるしかなかつた。

そんなボローティンの気持ちを死つてか知らずか、騎馬民族の末裔だと言つてこの男はさらりといつ告げた。

「まあ、取り敢えず夏の議会では」「苦労もん。これから、又忙しくなるからな」

「おいおい、未だか?」

「いやいや、これからが本番だな。何しろローエングラム公が来るんだからな」

ウランフは笑つたが、底冷えするような目が全てを裏切つていた。

その頃、ウォルフガング・ミッターマイマーは落ち着かない日々を送つていた。

帝国軍による同盟、そしてフュザーンへの侵攻、『神々の黄昏』(ラグナロック)作戦の決行日が　　彼の覚えている通りなら、だが　　近付いているからだ。

非番のその日、顔には極力出すまいとしている夫に、あの頃を覚えている妻の方はそつとコーヒーを出しながらこいつ言い寄越した。

「貴方、皆さんに相談してはどうつかしら?」

「エヴァ……」

最近、どこか丸くなつて来た妻の顔を眺めながら、ミッターマイヤーは微かに笑つて「いいや」と首を振つた。

「情報ソースの説明が付かない。確かに、ガウェインのように似たような境遇の人間は少なくないらしいけど、彼らも時間の迷子である事は隠している。

俺に出来る事は、例え泥縄にならうと、その場で全力を尽くす事だけなんだ」

その言葉に、夫のジレンマを見て取ったエヴァンゼリンは、黙つて空になつたカップにおかわりを注いだ。

そこに、

「ただいまっ！」

と、元気な声が響き渡つた。

お使いに出ていたフェリックスが戻つて来たのだ。

そのままパタパタと廊下を走り、洗面所で盛大に水が跳ね飛ばされる音がした。

その間に、ひょっこりと黒髪に琥珀色の瞳の少年が頭を覗かせた。

「ミッターマイヤー夫人、<sup>フラウ・ミッターマイヤー</sup>買い物袋を何処に置きましょうか？」

「まあ、ガウェイン君、フェリックスを手伝つてくれていたの？」

あらあらと、立ち上がるエヴァンゼリンにガウェイン・クラスター少尉は笑つて首を振つた。

「おまけのオレンジが重たそうだつたから、俺が持つてあげてたんですよ」

「そなんだよ、マーケットのお姉ちゃんがね、おまけだつて言って五つもくれたんだよ」

ミルクパックと、コーンフレークと林檎三つの入つた買い物袋をよいしょと持ち上げるフェリックスに、ミッターマイヤーも笑みを零した。

だが、休暇中の副官の来訪に、刺激されるものを感じた彼は、オレンジを下ろして来たガウェインを差し招いた。

「何か、フェザーンで動きがあつたのかい？」

「いえ、フェザーンと言うより帝国ですけど」

ソファーに腰掛けながら、短く答えたガウェインは電子新聞用の端末に、もつて来た情報カードを差し込み、広げて見せた。

「知り合いに無理を言って、最新情報を送つてもらつたんです。四日には、帝国では大規模な演習が行われたそうです。査閲総監にロイエンタール上級大将、三万隻規模の大演習で、一〇〇〇人以上の死傷者まで出したって」

「四日か」

低く唸る夫を、客にコーヒーを出しながらエヴァンゼリンは気遣うように見た。

だが、紙面を見ていたミッターマイヤーの声が跳ね上がった。

「キルヒアイスが復帰したのか！？」

それは、社会面の隅の方に、本当に小さく載つているだけだったが。

「五日付けの情報なので、本当に小さいものですが。いきなり先陣と言う事は無いと思いますが、元帥府には出仕しているようですよ」

ガウェインの補足に、ミッターマイヤーは安堵しつつも心の中で氣を引き締めた。

恐らく、フェザーン侵攻の総指揮をキルヒアイス彼が担うのだろう。

これまで相見える事の無かつた強敵と近い将来戦うであろう事實に、軍人として喝采を叫んでいるのを感じたのである。

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年十一月八日、帝国はイゼルローンへの遠征軍の陣容を大々的に発表した。

総司令官、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大将、副司令官にはコルネリアス・ルツ、ヘルムート・レンネンカンプの両大將。

その二日前に復帰したジークフリード・キルヒアイス上級大将の

方は、病み上がりである事を考慮し、第一陣として控える事となつたと発表された。

無論、それは嘘であり、彼にはフェザーン方面軍の先陣を任せられた事となつてゐる。

「卿等の勇戦を期待する」

陳腐な言葉であるが、それも使う人間によつて評価は変わるようだ。

ラインハルト・フォン・ローエングラムの口からその言葉が出た時、聞いていたその場の人間の殆どは、彼の彫像の如き美しさと共にその言葉に歓喜していた。

しかし、その中でただ一人、ロイエンタールのみが昂然と頭を上げ、その言葉に完璧な敬礼を持つて返していた。

理屈は簡単、ロイエンタールは作戦内容よりも、ミッターマイヤーと戦う事になつたと言つ事実に高揚していたのである。

慌しく荷物を纏める永の戦友を見ながら、フォルカー・アクセル・フォン・ビューローは長閑に茶を啜つた。

「急な御達しだねえ。大丈夫かい、ベルゲングリューン」

「……本気で言つているのか、ビューロー！」

ハンス・エドアルド・ベルゲングリューンの方はと言えば、手を止めて話すのも面倒だと、壯絶な勢いで荷物を纏めつつも器用に首だけ黒髪の友人に向ける。

本来なら、先月の内に出ていなくてはならない転属命令が、軍務省側の手落ちでつい最近届いたのである。

昔に戻つたような手抜かりにヒステリーを起しつつ、それでもベルゲングリューンは黙々と荷造りをしている。

「折角、キルヒアイス提督が復帰したのに、まあ寄りにも寄つてロイエンタール艦隊に配置転換なんてねえ」

「仕方があるまい、俺は軍人だ、辞令が来たならそれに従うしかな

い

生真面目に応える声に、ビューローは軽く肩を竦めた。

声が、全く字面を裏切っている。

雑用で走り回っていたので、ビューローはキルヒアイス提督とローエングラム公、そしてロイエンタール提督の間にあつたすつたらんたを見た訳ではない。

だが、その間元々胃薬依存症の気のあつたこの友人が、更に薬の量と種類を増やした事は知つている。

「まあ、ロイエンタール上級大将も優秀な方だ、色々勉強しておいで」

「そんな事を言いに、ここまで来たのか、卿は。そりゃこそ準備は良いのか！？」

「そりゃあ、私は残留組だし。キルヒアイス艦隊は一一月出撃だからね、まだ余裕があるとも」

ほろほろとそう答えられ、ベルゲングリューンはガントと執務卓を叩いた。

「だったら、手伝えとは言わん、邪魔しないでくれ！俺はまだやらねばならんことがあるんだ！」

「はいはい」

そう言って、ビューローはその場を立ち去った。

暫くして、ベルゲングリューンは親友が書き上げてくれていたらしい、転属に伴う雑多な書類を見付けるのだが。

## 5・終らせない為の戦い

丁度その頃、ユリアン・ミンツは護衛であるルイ・マシュンゴと共にフェザーンの街を走っていた。

駐在武官として、赴任して来てまだ一月にもならない。

だが、ここ数日何者かにつけられている気配があつたと思ついたら、今回はあからさまに襲われたのだ。

追跡者達は、荒事には慣れているようだが、隠密的な行動には著しく適性を欠いているようだつた。

だが、そんな些細な事より、今は逃げる事が優先である。しかし、土地勘の無い二人は裏路地に追い込まれ、ついにどん詰まりに追い込まれてしまつた。

「しまつた！」

行き場を失つた二人は、必死の思いで周囲に扉が無いか窺つた。マシュンゴの方は、最悪屋根の上にユリアンを逃がし、自分が困にならうとも思い詰めた。だが、近付いていた足音は、激しい物音に遮られた。

はつと振り返つた一人が耳を澄ますと、何人かが殴り合つ物音が続いた。そしてそれが止むと、こつこつと一人近付いて来るのが判つた。

「おい、誰かいるか？」

聞き覚えの無い、少し訛りのある同盟語が掛けられた。

返事をしたものか、二人が困つていると再び声が掛かつた。

「取り敢えず、そこは行き止まりだらう？　抜け道を教えてやる、早く來い」

「どうします、少尉」

困惑氣味のマシュンゴに、暫く逡巡していたユリアンは顔を上げてこう言つた。

「どちらにしろ手詰まりだ。それに、追跡者の仲間なら、ここでわ

ざわざ声を掛けて来るとも思えない」

油断させて、とも考えはしたもの、「結局手詰まりには変わりない」とコリアンは決断してその路地から出た。

長々と続く裏路地のそこそこで、とても堅気の船乗りには見えない、脛に傷持ちと言つた男達が五人、鮪のように転がつてゐる。

その中に一人、眉を顰めながら紙切れを見ている青年が立つてゐる。

服装は、そこら辺の自由商人やその船の乗組員と言つた感じだが、立ち姿の良さから軍人だとコリアンは見当をつけた。それも、多分帝国軍人。

と、その時、一人が出て来たのに氣付いた青年が顔を上げた。  
ミルクチョコレート色の髪と、限り無く黒に近いダーク・グリーンの瞳の青年だった。年回りは、アッテンボローと同じくらいだろうか？

青年の方は、コリアンの顔を見て、ぱっと目を見開きまじまと彼の顔を見た。

「あの……何か？」

「ああ、悪いね。成る程、お前さんが今、アンガラ非合法情報網で指名手配されている『コリアン・ミンツ』本人つて事か？」

そう言いながら、青年が差し出した紙切れを見たコリアンは、そこにプリントされている隠し撮りらしい自分の顔写真と、こと細かく書き込まれた外見特徴に文字通り目を剥いた。

「これは一体っ！？」

「何処の誰かは知らないが、『ヤン・ウェンリーの養子』に一万帝国マルクの懸賞を掛けた奴がいるって言つのは、小耳に挟んではいたがな」

そう言つた青年に、長身の青年 但し、目の前の青年よりは少々年上らしい が耳打ちした。

それに頷くと、ミルクチョコレート色の髪を搔き上げながら青年は一人に手招きをした。

「部下が、車を用意した。同盟弁務官事務所まで送つてやるから、早くここから離れよう。それと、もう少し目立たない変装を研究する事だ、お前さんは自分で思つてはいる以上に顔が売れているようだぞ」

そう言つて歩き出そうとした青年に、コリアンは慌てて声を掛けた。

「待つてください、貴方は一体？ 帝国軍の人が、どうして僕達を助けてくれるんですか？！」

慌てて止めようとしたマシュンゴの手を振り払つての言葉に、青年は振り返つて頭を搔いた。

何處か自嘲しているような表情で、青年は先に立つて歩く長身の男性を顎で示しながら応えた。

「俺の名前はホルスト・ジンジャー、あいつは軍隊時代からの部下のシユワルツコップ。俺達は、まあ帝国軍で生死不明になつてている人間さ。戻つたら軍法会議が待つてゐるんでね、細々と契約船員として暮らしている最中だ」

そう言つと、ジンジャーは一人に背中を向けた。

その夜、アドリアン・ルビンスキーは部下からの報告を聞いて、有るか無しかの苦笑いを浮かべた。

「どうか。だが、職務上フェザーンから逃げる事は出来ん。次の機会を狙え」

そう命じて通信を切ると、ざっかりと椅子を持たれかかりこいつ囁いた。

「竜頭蛇尾とは、言わせんよ」

そして暫く口を開じていた『黒狐』は、新たな手を打つべく体を起こした。

『神々の黄昏』に向かつて、多くの思惑が動いてた。

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年、一月二〇日。  
丁度その日、ヤン・ウェンリーイゼルローン要塞司令官兼駐留艦隊司令官は、とある場所に連絡を入れていた。  
色々悩みまくった挙句に、やっと『餅は餅屋』と言ひ諺に行き着いたのである。

『遅かつたな、ヤン』

画面の向こうで笑う男に、ヤンは渋い顔を隠さずいつ言った。

「私としては不本意なんですよ」

『不敗の魔術師』の言葉に、相手はこれっぽっちも感銘した風もなく話を切り出した。

『さて、ジョン・チャイニーズ君、次の任務だが』

「誰が、ジョンブルですか」

『ふつ、歴史学者志望の割には雑学が足りんな、ヤン。《ジョン・チャイニーズ》はヤンキーが付けた中国人への呼称だ』

鼻で笑われ、ますますヤンは渋い……否、どちらかと言つと泣きそうな顔になる。

どうやら、DNAに刻み込まれた苦手意識と言つものは、確かに存在するらしい。

画面の向こう側の相手の祖先から身を護る為、中華人民はどれだけの無茶と無駄を費やした事か！ 今や地球上には痕跡しか残っていない  
かつては衛星軌道上からも確認出来る、唯一の巨大建築物だったと聞く  
ウェンリーの祖先は努力したもの、肝心な結果は一切出せずつい  
だつたらしいのだが。

何せ現実に、何処吹く風と話を進める  
ターナー  
鞆靼人の末裔がいるのだが

ら。

『ほれ、余り時間は無い。金髪の坊ちゃんはこいつらの捨て札に大枚張つて喧嘩を買い取つたんだ、今日明日中にも第一陣はお前のところに来る筈だぞ』

脅しても何でもなく、歴然とした事実だから痛い。

とにかく前後の対策の為、ヤンは針の筵に座り直した。

三時間ばかり掛かって、はあやれやれと出て来た司令官を待つていたのは、帝国軍来襲の一報、それも大艦隊の襲来と言つものであった。

敵襲を見出したのは、丁度哨戒を兼ねて演習中だったミッターマイヤー分艦隊であった。

……実を言えば、そろそろ到達するであろうと考えたウォルフガング・ミッターマイヤーが、そつと演習予定を出していたのである。……おかげで、今回戦艦は汚名を被らずに済んだのだが、それは誰も知らない事である。

ともあれ、緊張しつつも愉しい艦隊訓練に興じていたミッターマイヤー分艦隊は、敵軍襲来に大いに戦慄驚愕したのである。

分艦隊旗艦艦橋に、主任オペレーターのコーネリア・アダムス少尉の声が響き渡つた。肩口で切り揃えられた金髪が、彼女の心情に吊られて揺れる。

「敵影発見、数、算定出来ませんっ！」

正面スクリーンに映る、続々と数を増やしていく光点に、戦慄から来る沈黙が艦橋を満たす。

それを破つたのは、ヘルガ・ミュンツァー副長の一喝に近い声だ

つた。

「敵旗艦の確認をつ！」

「は、はいっ」

慌しくオペレーター達がコンソールを弄る中、ミッターマイヤーは黙つてスクリーンを睨み付けていた。

調べるまでもなく、今ここに来た敵の総指揮官が誰であるか、彼には否と言つほど判つていた。

紙コップに入れたコーヒーを差し出しながら、ガウェイン・クラスターが呟く。

「……来ましたね」

「ああ。……ガウェイン、イゼルローンに入電、帝国の大艦隊が襲来したと」

「はい」

軽く強張つた顔で年若い副官が通信機に向かつと、ミッターマイヤーは全艦隊に速やかに後退するよう命じた。

如何に狭い回廊内とは言え、敵の大軍を前に浮き足立つているだろう新兵ばかりの分艦隊で、戦端を開くような愚を彼は冒さなかつた。

流れるような艦隊運動で、速やかに要塞方面へと撤退する分艦隊を、ロイエンタール側も捕らえていた。  
賞賛に値する速度と、艦隊統率に見ていた幕僚陣から溜息が漏れる。

「分艦隊とは言え、敵戦力を削ぐに越した事は無い」と、追撃を具申したヘルムート・レンネンカンプ大将に、総指揮官であるオスカー・フォン・ロイエンタールはやや酷薄に「無用」と言い捨てた。

その言葉に、コルネリアス・ルツィは小さな敵を追い回す事に意義を見出さないのだろうと思い、又同時に以前と較べて精神的に改

善されたのだろうとも思っていた。

だから彼は、進言を退けられ、鬱を震わせて不服を噛み殺す年上の僚友を宥めに入つた。

だが、何の事はない、ロイエンタールはその分艦隊の動きから、その指揮官を正しく看破していただけである。

だからこそ、彼も追撃などと言う無粋で無駄な真似はする気にならなかつたのである。

乱世の将としての感覚と、親友への情と言つ相反するものを擦り合わせて出した結論によつて、ロイエンタールは真つ直ぐイゼルローン要塞へ向かうよつ命じた。

丁度その頃、ラインハルト・フォン・ローホングラムは我が世の春を謳歌していた。

半年以上入院していた親友が軍務復帰を果たし、無事第一二陣と言う名田ではあつたが作戦に参加する事が出来たのだから。

参謀長からは色々ぐちぐちと言われたが、取り敢えず總て聞き流してフェザーン侵攻の青図面に手を入れている真つ最中である。

「ラインハルト様、そろそろお茶になさいませんか？ アンネローゼ様のケーキがござりますよ」

「そうか、今行く！」

入力を済ませ保存すると、ラインハルトは端末の電源を落して立ち上がつた。

因みに、ここはシュワルツェンの館の、二人共用の書斎である。キルヒアイスが入院し、姉がキルヒアイスの両親と共に彼の看護についていた間、何となく元帥府の執務室に泊り込んでいたラインハルトであったが、退院と同時に館にちゃんと帰るようになったのである。

無論、二人掛けでお小言を喰らつたのは言つまでも無いが。クレープの間に林檎の甘煮を挟み、オープンで焼いたアップル・

シユゼットとたっぷりクリームを浮かべたクリームコーヒーを並べるキルヒアイスの姿に、ラインハルトはほつとすると同時に、心の底から込み上げてくる喜びを噛み締めていた。

思い返せば一月、最初に入った報告は『キルヒアイス上級大将、死亡』であった。半狂乱で情報を集めさせ、辛うじて即死は免れた事を知ったものの、頭部強打で昏睡状態が数ヶ月に渡つて続いたのである。

彼らの職業は要するに軍人で、何時どんな形で死ぬとも限らない職業で。

それでも、ある意味妙な確信の下に、ラインハルトはキルヒアイスは助かり復帰すると信じていた。

そしてそれが達成された今、彼は自分の勝利を、取りも直さず銀河統一の野望の成就を確信していた。

「キルヒアイス、勝つぞ」

あまりにあっさりとした、そして絶対の自信と共に告げられた言葉に、キルヒアイスは軽く眉を顰めながらこつ聞いた。

「同盟には、ヤン提督を始めとして、まだ提督方が残っていますよ？」

「確かに、あの親父は怖い。だが、聞けばその相方だつた提督は軍人を辞めて政治家に転向したそうだ。ヤン・ウェンリーはイゼルローンに雪隠詰めだ、如何にあの切れ者が頑張つたところで、各個撃破になるだけだ」

フェザーンからの情報には、一応ラインハルトも田を通していたが、彼からすれば、単に同盟が首を締めているようにしか見えなかつた。

しかし、キルヒアイスの方はこの状況でわざわざ政治家に転向したと言う事態に、幾ばくかの引っ掛かりを覚えていた。

その考え方もうとするキルヒアイスの、やつと伸びてきた赤い髪を摘まんでラインハルトは笑つた。

頭部手術の為に、一

時は丸坊主にしていたのだ。

「やれやれ、やつと伸びた髪が白髪になつてしまつて、キルヒハイス。折角のケーキとコーヒーが冷めてしまつ、喰おつ」

「ラインハルト様……」

フォークを取り上げると、思い出したようにそして悪戯を思い付いた悪ガキの笑顔で、ラインハルトは笑つた。

「あの魔術師のお手並みを拝見だ。奴が、ロイエンタールをやり過ごして本隊に合流したとき、意味があるような本隊がさて残つているかな？」

戦後に、ラインハルトが同盟軍の議事録を調べた際、彼を憮然とする記録が認められていたのだが、それは又後の話である。

## 6・トリスタン攻防戦～ベーオウルフの誤算

宇宙暦七九八年、帝国暦四八九年一一月のイゼルローン攻防戦は、まずはロイエンタール側の優勢で幕を開けた。

すばやく半包围を作った攻略軍側は、対応すべく出撃して来た駐留艦隊を要塞砲を封じる形で射程内に引き込み、上手く消耗戦の状態に引き込んだのだ。

この時点では、ヤンはロイエンタールの手腕に感嘆し、ついでこの状況で取りうる最良の策を考えた。

秘密交信の内容もあり、一つ大きな詭計トリックを仕掛ける事にしたのである。

悠然と、目の前の混戦を眺めていたオスカー・フォン・ロイエンタールに、オペレーターから戸惑い交じりの報告が入った。

「戦艦ヒューベリオンが出撃してきました」

「何だと？」

その言葉に、ロイエンタールは反射的に同盟側のトリグラフ級戦艦の数を確認していた。

現在、戦場で確認されているのは一番艦のみで、ミッターマイヤーが乗っているらしい七番艦の姿は無かつた。

「どうしたミッターマイヤー、お前が守るはずの男を、俺が倒してしまつた？

一瞬の逡巡をおぐびにも出さず、ロイエンタールは敵旗艦に向かって進撃するよう命じた。

あるいは、これで戦闘を決することが出来れば、ミッターマイヤーを無傷で我が手に取り戻せると喜び欲が出たのかもしれない。彼は知らない。全ての疑惑を飛び越えて、強襲揚陸艦に身を潜めている蜂蜜色の狼がいる事を。

あれは、『神々の黄昏』（ラグナロック）作戦の後。何度かあつた酒場での一時。

『叛乱軍に旗艦に乗り込まれてしまつた』

苦笑いした親友の顔。

『なかなか大した技量の獵犬だつたな』

今なら判る。親友の相手をしたのは、『薔薇の騎士』（ローゼンリッター）連隊元連隊長ワルター・フォン・シェーンコップ。ならば。

時間は少し戻つて、強襲揚陸艦に乗り込む『薔薇の騎士』連隊の面々は久方ぶりの大仕事に高揚していた。

何しろ、前回の要塞上でのどんぱちどころか、あの要塞奪取作戦以来の大仕事である。

「囮を出すから、戦闘中の敵の親玉ひつ攫つて来いつてさ

「海賊並みだねえ」

そんな軽口を叩き合いつつも、隊員達の誰もが作戦の重要性を悟つていた。

何しろ、三艦隊のトップ三人の中で、総指揮官とその下に同格の大将二人がいると言う事は、そのトップを搔つ攫えば同格同士動ける事は必定、そうなれば後は『奇跡の（ミラクル）ヤン』の独壇場。

馬鹿でも判る理屈と言つのが、彼らの共通認識だった。

さればこそ、彼らは作戦準備に没頭したし、他の者からすれば不謹慎極まりないジョークを飛ばし合つていた。

だからぎりぎりになつて補充要員として飛び込んで来た奴も同様だと思っていた彼らは、最後のブリーフィングも簡単に済ましてしまつたのだが。

敵旗艦に取り付くや、『薔薇の騎士』連隊は当初の予定通り艦橋、又は高級士官の居住区等へロイエンタールの姿を探して小隊ごとに駆け出した。

そしてそこここで発生する防衛隊との攻防戦の為、彼らは中々前に進むことが出来なかつた。

そんな中、その小柄な補充要員は一人真つ直ぐある場所目掛けて走つていた。

かつての己が旗艦と同じ基本構造を持つ、勝手知つたる艦ふねである。彼が通風口を伝つて辿り着いた先は、指揮官専用の更衣室だつた。

潜む事暫し、自らも装甲服を纏うべく降りて来た金銀妖瞳の美丈夫が誰何の声を上げるより先に、彼はその傍にいた二人の護衛を打ち倒していた。

振り返つたロイエンタールは、ドアをロックする相手に向かって、いつそ艶然と微笑み掛けた。

「やつと、一人つきりになれたな」

その言葉に、侵入者はヘルメットを脱いで微笑んだ。

そしてその無邪気なまでの笑顔のまま、ミッターマイヤーは戦斧を構えて飛び掛つた。

一気に間合いを詰めると見せて、それが逆手のナイフを隠す為と看破したロイエンタールは、あえて大振りに後ろに下がり、ミッターマイヤーの間合いを潰すと同時にリーチを頼みに相手の軸足を狙つた。

ここで、普通なら横か後ろに逃げるところを、ミッターマイヤーは真つ直ぐ正面へと踏み込んだ。蹴り込みと同時の斬撃を紙一重で受け流し、ロイエンタールは笑つた。

久々に血が滾るのを感じた。

それはミッターマイヤーも一緒である。身内の狼の滾りが、彼

の瞳を銅色に染めている。

「会いたかつたぞ、ミッターマイヤー」

「俺もだよ、ロイエンタール」

滑るような長身の踏み込みに、隠しナイフの存在を意識したミッターマイヤーは背面へ回り込もうとした。が、それこそを誘つていったロイエンタールによつて、右肘内側への掌打と巻き込みを喰らつて、手の中の獲物が飛んだ。

だが、振り翳されるナイフを掻い潜つて、氣絶した兵士の傍に落ちた軍用ナイフを拾つた。一緒に落ちている銃には目もくれなかつた。

欲しいのは命ではなく、彼自身だつたから。

ロイエンタールもまた、完全に現在目の前にいる人間のみに集中し、関節部分とはいえ装甲服を殴り付けた左手に痛みを覚える余地は無かつた。

理屈も、理由も無く、唯判つていた。……今勝てば！

互いに互いを手に出来る、そう考えていた。

この手に取り戻すことが出来る、そつ、全てを！ ミッターマイヤーは今、俺しか見ていないのだから。

奸物どもにも、彼の両親にも渡さない、だつて今、ロイエンタールは遙かな彼方ではなく、自分を見ているのだから。

切り結ぶ刃、重なり合つ刹那の肉体、全身全靈を掛けた戦いは、唐突に終わられた。

取り敢えず、いの一番に乗り込んだつもりであつたシェーンコップは、ロツカールームで繰り広げられる夢の対決に一瞬面食らつた。

「ロイエンタール、お前の首は誰にもやらないつ！」

「良く言った！」

知る者が見れば、それはまさに夢の対決だつたろう。

「「俺はお前に勝つ！」」

二人同時にそう叫ぶ。その後に続くのも同じ言葉だ。

「「勝つて、俺の望みを適えるー！」」

しかし。

「水！」

ミッターマイヤーには聞き覚えのある、ロイエンタールには始めて聞く声、そして二人の間を熱線銃の閃光が割つて入った。

「シェーンコップ少将！？」

左右に裂かれた双璧の内、ミッターマイヤーの方が口を開いた。邪魔だと叫ぼうとしたロイエンタールの気勢を制して、薔薇の猛者は言い放つ。

「オスカー・フォン・ロイエンタール提督。お楽しみのところを申し訳ないが、今貴方の身柄は、貴方のその瞳より稀少でね」

「邪魔をするか、犬！」

ロイエンタールへの返答は、薔薇の騎士連隊がなだれ込む事で示された。

その言葉に訝しみつつ、それでもミッターマイヤーは現在の味方である白兵戦の勇者達の前に立ちはだかるとした。

その次の瞬間、ロッカールームは炸裂音と爆風に閉ざされた。

「！？」

「閣下！ ロイエンタール閣下！」

それは、参謀長であるハンス・エドアルド・ベルゲングリューン中将の声だった。

部下の報告から、ロッカールームの異変に気付いた彼は、その上層の部屋から床をぶち抜き、救援隊を突入させたのである。

平時ならロイエンタールも即時対応出来たのであろうが、爆風に晒され、また彼一人装甲服を着ていなかつた事が仇になつた。

「ツターマイアアつ！？」

「ロイエンタアアルウ！」

瞬く間の乱戦によつて、一人は再びもぎ離されたのである。

敵旗艦から切り離した揚陸艦の中で、イゼルローン要塞防護司令官は蜂蜜色の髪の小柄な分艦隊指揮官を見つめる。

『タリマイヤーの方は、神妙に見えるかその実、躊躇の一つかな  
かつた決闘への未練半分、捕まえられなかつたロイエンタルへの  
未練半分で落ち込んでいたのだが。

「何でお前さんが、ここにいるのかはともかくとして……」

現齋の奇士連隊連隊長トモの加藤トモが笑一箱。

「いや、惜しい事をした。しかし向こうもいきなり天井落としかま  
すとはな」

向こうもやりますねえ」  
おはい

垂れでいる//ツターマイヤーの肩を労わるよひに呟いた。

「ロイエントーク提督を捕まえてしまふに。惜しかつたですねえ」

三

それに向かって、親切なライナー君は今回の作戦を簡単に話してくれた。

内に響き渡る絶叫だつた。

全てを知ったミッターマイヤーの反応に、ほんと彼を見つめる連隊員と、こらえ切れずに爆笑する元連隊長がそこにいた。

「申し訳ありません」

漸く聴覚の麻痺が取れた司令官に、揚陸艦を取り逃がした事を報告し、ベルゲングリューンは頭を下げた。

「別に卿の責任ではない」

そう、責任を問う声ではなかつたが、金銀妖瞳の提督の声は地獄の底から響くようであつた。

「俺が熱くなりすぎたのだ。少し、頭を冷やして出直すとしよう」氷点下、否絶対零度のその声に、キルヒアイス艦隊から転属してきた参謀長は文字通り凍り付くしかなかつた。

こうして、双璧の千載一遇のチャンスは浪費され費え去つてしまつた。

それは、「タイムトラベルが必ずしも都合の良い方へ転がるとは限らないと言う、一例なのかもしけないね」と、呟いた東洋人がフエザーンにいたとか、いなかつたとか。

「ヤン羅師父」

そう声を掛けた、ミルクチョコレート色の髪の青年に、眠そうな顔の占い師は少し困つたように頭を搔いて言つた。

「師父は止めてくれないかな、ホルスト君」

「すみません」

そう言つ帝国人の青年は、お茶の入つた紙コップを指先で回しながらぼやいていた。

「どうにも嫌な感じがするんですよ」

「？」

「あの人、否あいつ、妙なところで熱くなつて、ドジ踏むところがあるから」

そう言つて、また溜息を吐いた青年に、謎の占い師もつんづんと頷き実存顔で付け足した。曰く、

「人は自分の性分からは逃げ切れないからねえ。」

その声が聞こえたのか、ミシターマイヤーの絶叫はまだ続いていた。

## 7・舟は漂う

帝国暦四八九年、宇宙暦七九八年一一月九日、イゼルローン攻略軍の後詰として、キルヒアイス軍が出立。

しかし、一二月一〇日、ジークフリード・キルヒアイス上級大將は全軍に、目的地がフェザーン回廊である事を公表した。

征路を行く事二週間、一二月一四日に帝国軍の大艦隊はフェザーンに達したのである。

ホルスト・ジンツァーは天空を圧し包むように展開される艦艇群を、万感の思いで見上げていた。

あの日、そう彼にとっての五年前の今日、ミッターマイヤー上級大将揮下の提督としてフェザーン制圧の一翼を担い、彼はここに乗り込んだのだから。

だが、その艦艇の中に真紅の旗艦を見出し、ジンツァーはゆっくりと踵を返した。

あそこにいるのは、彼を知らない彼の恩人である。

『この世界』では、ホルスト・ジンツァー中佐は輸送艦隊の事故で死亡していた。

彼が、ジークフリード・キルヒアイスに会つ筈だった、軽微で済んだ筈の流星群との接触事故は艦隊を半壊させるほどの大災害となっていた。

ホルスト・ジンツァー『上級大将』はあの日、一年前のシャトル墜落事故で亡くなった『ミッターマイヤー主席元帥』夫妻の墓参りに行っていた。

事故後ジンツァーは、指導者を失い混迷し迷走する帝国政府の建て直しそっちのけで、『テロリスト』捜索に奔走するかつての同僚達と対立した。

そして政局が落ち着いたのを見届け、軍を退役する事にした彼は、上官でありかつての同期である元帥にその報告をしに来ていたのだ。長く付いて来てくれた参謀長と副官、二人だけを伴つての墓参の帰り道、彼らの乗つた地上車の目の前で何かを避けようとして横転したトレーラーと、それに弾かれた大型車が道を塞いだ。

そこから強い衝撃と共に彼らは『五年前』のフェザーンに投げ出された。

納得行かない事に、服装はそのままだが、五年前の肉体で。そして今、彼らは雇われ航宙士として密やかに生活していた。しかしその生活も、どうやらこれで終わりのようであった。

程無く、彼は何時もの大柄なアフリカ系民族の准尉と一緒に、人型の大荷物を抱えて途方にくれるヤン・ウェンリーの養子を見付けたからである。

帝国軍の大艦隊がフェザーンを武力制圧し、イゼルローンで未だ大規模な戦闘が繰り広げられている最中、同盟中央部では予想外の事態が引き起こされていた。

理由はまちまちであつたが、首都星を挟んだイゼルローン、フェザーン方面の反対側で、大小様々な暴動事件が発生したのである。その鎮圧に、ウランフ・ボルド・ブルグド率いる第一〇艦隊が差し向けられる事となつたのだ。

「なぜ俺だ？　こう言つのはビュコックの爺さんが向こうだうにつけ！」

首都からの通信後、そう叫んで床にベレー帽を叩き付けたウランフだつたが、すぐに思考を切り替え秘密回線を開いた。

最初の計画から、若干の軌道修正を余儀なくされたからである。

「ほう、発想の転換かね？」

すつたもんたの続く宇宙艦隊司令部の一角で、アレクサンドル・ビューラック大将と新任総参謀長のチュン・ウー・チョンの二人は、急遽ドサ回りが決まつた第一〇艦隊の提督からの秘密通信を受けていた。

『そう、暴動騒ぎのお蔭で、最初のコルク栓<sup>プラン</sup>は使えなくなつた。である以上、真っ当な方法では我々はジリ貧になるだけです』

そう言つた騎馬民族の末裔は、モニターの中でふつと悪く笑つた。  
「なるほど、ヤン提督に活躍して戴く訳ですな」

のほほんとそう応えた《パン屋の二代目》に向かつて、ちょい不<sup>良</sup>どじろでは無い親父は「その通り」と頷いた。

『どうせ、今残つている艦船をかき集めたところで、後一艦隊ひねり出せれば御の字でしょ。しかも、練度も低ければ質も最悪。となつた以上、こちらを主力などとおこがましい事を考えなければ良い。つまり、中央の艦隊は時間稼ぎの壁に徹し、大きく迂回してくる本隊を待つ事にすれば良い』

「上手く行くかのう?」

「老公の疑問に、『頭が切れて凶惡な助さん』はそれこそチエシヤ猫のように笑つた。

『なあに、年金の分働くと言つてやればいいんですよ、あのペテン師には』

「まあ、敵も味方も、イゼルローンは持ち運び出来ませんからな。あそこを上手く使って、ヤン提督にはこちらに戻つて戴きましょう」

『今、この国家の危機に際して、あそこを逃げ込み先にしようなんぞとふてえ事を考えるお偉方が出て来る前に、ヤンの奴には仕事して貰いましょうか』

《穏やかそだが辛らつな二代目格さん》の言葉と、それに笑顔で応えるウランフの姿に、ビューラック大将の副官はげんなりと囁の辺りに手を当てていた。

ウォルフガング・ミッターマイマーはその頃、黙々とルーチンワークに等しい出撃を繰り返していた。

年末のあの失敗を、未だに引きずる彼を艦隊のスタッフ達は容赦なく突つ突いてくれる。

「あーあ、前回の作戦成功してりやあ、もつちよつと楽だったかねえ？」

「わっかんないアルよ、意外に大将のどつちかが、ここでチャンスつとばかりに大攻勢掛けて来たかもネ」

「まあ、どつちにしる、今とは違うことになつていたつて言つのは外せないよねえ」

アイリーン・ザザーランド准尉、チャン・リン曹長、デライラ・カーライト少尉の三人、通称『ベーオウルフのかしまし娘（命名ヤン・ウェンリー）』に、副長であるヘルガ・ミュンツァー少佐の永のような一睨みが飛ぶ。

いくら入港中とは言え、どんな不測の事態が起きるか判らないからだ。

お嬢さん方の突つ込みにがっくりと頃垂れるミッターマイマーに、すみませんと恐縮しつつ艦長手すから「コーヒーを差し出した。

おやと思いつつ受け取ったミッターマイマーの傍に、通信機をいじつていたらしい若い副官が戻つて来た。

「ミッターマイマー提督、面倒な事になつてきましたよ」

「どう言つ」とだい、ガウェイン

司令部からの連絡を持つて來たガウェインは、頬を搔きつつ顔に大きく「厄介だ」と書いてミッターマイマーに報告を読み上げた。

同盟領内の暴動多発と言う知らせは、ミッターマイマーにも驚きをもたらした。理由はもちろん、『前』には無かつた事態だからだ。

生き残った人間が多いという事は、『前』には無かつた事態が生じると言つ事だらうか？

ミッターマイヤーの思いの向こう側で、ガウェインとマリエ・ローゼンバンク中佐とが会話を続ける。

二人は、一時期フェザーンのフラット（アパート）で隣同士だった時期があり、殆ど親類の甥っ子と年若い叔母さんの様な関係にある。

「ディアス、ゴメス、カーン、ヴェスピツチ、バルボア、そしてマゼラン。あら、全部商業惑星だわ？ 何でこんなところで」

「ええ、察するところ黒狐の悪あがきかなあつて、俺は睨んでますけど。でも、今更ですよねえ、フェザーンはもう、帝国に武力制圧されちゃつているのに」

その言葉にはつとなる。ミッターマイヤーの脳裏を駆け抜けるシリヴァーベルヒ、ヤン、ルツィ、オーベルシュタイン、そしてロイエンタールの顔。地球教のテロによって、そして策謀によって亡くなつた人々。

「ガウェイン、地球教とフェザーンは繋がりが深いのか！？」

それは質問と言つより詰問に近かつたが、ガウェインは驚きつつも淀みなく頷いた。

「ええ、フェザーンは帝国と同盟、両方の信者が聖地巡礼のターミナルにしてますから。あそこに信者を送迎する事で、糊塗を凌ぐ自由商人だつて多いですし」

「ミッターマイヤー提督、まさかこの暴動を指示したのは地球教だと仰りますの？」

ローゼンバンク艦長の言葉に、思わず縦に振りそつになつた首を慌てて止め、ミッターマイヤーは何か「確信はない」と言つた。

だがそれに向かつて、ガウェインが思い出したよつて言つた。周囲の耳には入らないように。

「ミッターマイヤー提督、『前にあつた』んですね、地球教絡みでその言葉に、ミッターマイヤーは灰色の瞳を伏せ、小さく頷いた。それを見ていたローゼンバンク艦長の表情が強張り、ガウェインは跳ね上がるようになつて叫んでいた。

「どうしてそれを先に言わないんですか！」

そしてガウェインは司令部に「報告する事がある」とだけ通信を入れると、入港後の細々した事を艦長と艦橋スタッフに任せて、ミッターマイヤーの手を引いて走り出した。

「が、ガウェイン、何が」

「良いですか、ミッターマイヤー提督、帝国よりずっと同盟の方が地球教徒が多い、判りますか？」

「え？」

港湾エリアから司令部のあるフロアに向かうエレベータの前で、ガウェインは当然だと片眉を器用に上げて振り返った。

「同盟は共和制です。それは判っていますね？」

「あ、ああ」

「である以上、共和制では個人の自由と言う奴が帝国からは想像出来ないくらい多いんです。」

その中には、当然宗教の自由もある。時の政府を批判するような活動をしないのであれば、どんな如何わしい宗派であろうと信者獲得の邪魔は出来ないんですよ！」

啞然とするミッターマイヤーに、いつそ酷薄に そう、と

ても懐かしい表情で ガウェインは笑った。

「そう、例えテロリストの巣窟だらうと、宗教を名乗る以上は彼らの『自由』も保証するのが共和主義って奴ですから」

その言葉に、冷たいものが背を流れるのを感じつつ、だが同時にミッターマイヤーはある疑問を覚えてエレベータの中で年下の副官に向き直った。

「じゃあ、どうして奴らは同盟を潰そつとする、帝国やフェザーンに加担する？ 帝国よりも信者が多いんだろ？」

「そうですね」

動いていく階数表示を目で追いながら、ガウェインは「よく判らない」と首を振った。

「同盟が潰れそつだからって、そんな簡単な訳じゃないとは思いま

すがね。……羅師父やんせんせいがいてくれたら、知恵を貸して貰えたかな？」

「ayan?」

訝しげに聞き返すミッターマイヤーに、ガウェインはこりと普段の笑顔に戻つてこう言った。

「前に話したでしょ？ 仲良くしてくれた司書の先生。多分漢字表記が違うんだと思うんですけど、あの先生も『ヤン・ウェンリー』って言うんですよ」

その言葉と同時に、司令部エリアへの扉が開いた。

それと前後して、フェザーン。

ユリアン・ミンツはざつくりとしたセーターと、頭をかつぱり包む帽子とトンボの様な眼鏡をかけて歩いていた。

その横には、穏和で理知的な二〇歳前後の青年が、やはり帽子を被つて こちらは、フェザーンのプロフライングボールリーグの人気チームのロゴ入りキャップだ

一姿で歩いている。

この青年の名前は、アルフォンス・レーグナー。ホルスト・ジンツァーの部下と名乗り、市街地の様子を見たいと言つた、ユリアンのボディ・ガードを買って出た人物である。

年齢的にも近く談笑していれば兄弟に見えなくもない事、そして彼の射撃と状況判断能力から、ジンツァーも許可したのである。

今、ユリアンはマシュンゴ准尉、ヘンスロー弁務官と共に市内のチャイナ地区と呼ばれる区画にある雑居ビルに身を寄せていた。

ジンツァーに匿われた後、ガウエインからのメモを頼りに逃げ込んだのが、ここにある『行雷大厦』（ハンロンマンション）と言う雑居ビルだったのである。

ここに住人のほぼ全員が、フェザーンの惑星警察組織の人間（何しろ家主からして元惑星警察警部だ）である。元々自治領主の『裏』を追いかけていた上に、所謂マフィア達も一日も一日も置くと言う

彼らの元に居着いてからは、それなりに安全を確保していた。

「思つたより、平静ですね」

ユリアンの囁きに、アルフォンスはくすりと微笑んだ。

「キルヒアイス卿の薰陶だろうね。尤も、ついこの間、たがを外した兵士が婦女暴行をやらかしたとかで、公開処刑されていたよ。馬鹿な奴らだ。の方だつて、兵士が意味無く平民に暴力を振るう事を許される筈が無いのに」

後半は、特にユリアンに聞かせるとか、そう言つつもりでは無かつたようだ。

だが、その弦は周囲に気を配るユリアンの耳には届かなかつた。

## 7・舟は漂う（後書き）

惑星名、地区名は、自分設定です。

原作に無い部分を補う為に付けていますので、「原作に無い」という指摘は結構です。

判って書いてんだよ？

ウランフさんの名前は、当時の役場の人間が、間違えて所謂幼名を FIRST NAME、MIDDLE NAMEとして登録してしまったので、書類上こう書かなきやならなくなつていて「原作に無い」という裏設定を作っていたんですが、裏なのでその辺書けなかつた為原作に無いつて書かれてると指摘されてしまいました。

## 8・何日君再来（いつのひかまたきみぐる）

司令部の通信室で、どんな会話がなされたかは定かない。

しかし、その会話の後ヤン・ウェンリー司令官は明確な方針を幕僚達に示した。即ち、『イゼルローン要塞の放棄』である。

ヤンとショーンコップ要塞防護指揮官の会話に、ウォルフガング・ミッターマイヤーは思わずしぐさうになった。

「必要なものを必要な間だけ借りた。必要なくなつたから返す、それだけの事さ」

「また必要になつたら？」

「また借りるさ。その間帝国に預かって貰う。まあ、利子が付かないのが残念だけど」

「要塞とか人妻つてものは、簡単に借りられないものですがね」

二人の会話の、余りの強烈さについ頭を抱えていたミッターマイヤーは、だからヤンのもつと酷い言葉を聞き落とした。

「相手はロイエンタールだ。『ヴェスター・ラントの英雄』だ。引っ掛けがいがあると言つものぞ」

その頃、オスカー・フォン・ロイエンタール上級大将は攻撃許可を申請する艦隊司令官に、些か閉口気味であった。

ヘルムート・レンネンカンプ大将は決して無能ではなかつたが、とにかく田の前の戦場での完全勝利に固執する嫌いがあり、その性質を持つて、ロイエンタールは彼を『戦争屋』と断じていた。

「力ずくの攻撃は無益だ」

総司令官の言葉に、レンネンカンプは大いに不満であった。

既にフェザーンは武力占拠が終わり、先陣は叛乱軍領に進攻を始めているのだ。このまま、イゼルローンを包囲して遅々として動かないという事態になれば、フェザーン側の味方ばかりが戦功を上げ

る事となる。

ならばせめて、イゼルローンを奪取するなり撃破するなりしてあの『ペテン師』を撃破せねば面目が立たない、と言つのが彼の言い分であつた。

それに対し、ロイエンタールはヤン・ウーンリーがイゼルローンを放棄する可能性を示唆するのだが、レンネンカンプは全くそれを受け入れようとはしなかつた。

「同盟が滅びてもイゼルローンが不落であれば、ヤンの武人としての矜持は保たれるではないか」

「ああ、ヤンが卿ならそう思うだろうよ。」

髭を震わせて言つてのけた年長の部下に、ロイエンタールは侮辱以上に嫌悪をまぶして、冷然と言い切つた。戦争屋としての視野の狭さも然る事ながら、今敵対する黒髪の敵将を過小評価するレンネンカンプに、ロイエンタールは言い様の無い嫌悪を感じていた。

……それは、ヤンに従う親友への侮辱と、彼は捉えていたのである。

「レンネンカンプ提督、できれば私も要塞に大攻勢を掛けたいと思う。しかし総司令官殿が否<sup>ナイ</sup>と仰る以上、従うのが筋と言つものである」

頭から湯気を立てている年上の僚友を宥めるのは、すっかりコルネリアス・ルツツの役目となつていた。彼としてもやりたい訳ではないが、結果として彼に回つて来ているのである。

仲裁役への礼儀として、ロイエンタールは取り敢えず矛先を收めた。尤も、金銀妖瞳<sup>（テロクロミア）</sup>から表情は消えていたが。

取り敢えず、目下の仕事としてロイエンタールは所謂、「嫌がらせの攻撃」を始めたのである。

結果として、イゼルローン側の忙しさは筆舌に尽くしがたいものと化した。

何しろ、要塞からの撤退準備、民間人の避難とを同時にこなさねばならない上に、煩く突つ掛かつて来る敵を受け流さねばならないのだ。

「超過勤務は、俺の主義に反するんだ」

そう言つたのは、度重なる出撃から戻つて来た第一空戦隊隊長のオリビエ・ポプランである。

食堂に入るなり、初期の社会主義者よろしくテーブルを叩いてこう喚いていた。

「ハイネセンに戻れたら、絶対パイロットの組合を創つてやる！兵士の過重労働を無くす為に、生涯を掛けたてやるからな、見てろよ管理者どもめ！！！」

「お前さんは、女に人生掛けているんじゃなかつたのか？」

突つ込むのは、第二空戦隊長のイワン・コーネフである。

撃墜王二人の掛け合いを眺めつつも、ガウェイン・クラスター少尉は猛然と食事を焼き込んでいた。

つい先程出撃命令が出た為で、取り敢えず固形物を一通り胃に詰め込むと、アルカリ飲料のパックを掴んでガウェインは《ベーオウルフ》の納まつているドックへと走り出した。

「あ、ガウェイン、あんたもこれから？」

最初にそう声を掛けてきたのは、《ベーオウルフ》ブリッジクル  
艦橋要員第二

グループの女性士官達である。ミリー・ヤンセン准尉、ミランダ・ウォーター曹長、クwan・ヒョンファン軍曹と言つた面々が、アイリーンやリン、デライラ達のグループと待ち回りで艦橋に詰めているのである。

「ねえ、アッテンボロー提督との協同作戦って本当？」

「うん、アッテンボロー提督が提出して、ヤン司令官の添削付き！」

空になつた飲料パックを、離れたダストシートに投げ込みながらの応えに、ウエーブ達の間に笑いが弾けた。

「そりゃあいいわ、楽勝つて奴じやない」

「取り敢えず一仕事しましょうか」

キャラキャラと持ち場に向かうウェーブ達と共に、ガウェインは『ベーオウルフ』へと乗り込んだ。彼らの役目は、「送り狼を横合いから殴り付ける事」、であった。

艦橋にガウェインが上がって来ると、既に艦橋に入っていたミッターマイヤーがローゼンバンク艦長から受け取った書類に目を通している最中であった。

「すみません、遅くなりました！」

「気にしなくていい」

恐縮する若い副官に笑い掛け、ミッターマイヤーはメインスクリーンに目をやつた。

「ところで、ガウェインは撤退準備は進んでいるのか？」

「元々、身一つで来たようなものですから、鞄を閉じてしまえばって言いたいところですけど、うつかり増やしてしまった雑誌や本の荷造りにえらい事になつてます。最悪、読み掛けと未読だけ持つて、雑誌と読んだ本は置いて行く事になりそうです」

そう言って舌を出したガウェインに、ミッターマイヤーは小さく苦笑した。

「うちは、フェリックスがな」

「フェリックス君が？」

「ああ、『熊ちゃんと一緒じゃなきゃ、ヤダ』って」

今、ミッターマイヤー一家が使つてゐる官舎の子供部屋には、愛らしい薄茶のテディ・ベアの壁紙が張つてある。こちらに着て間もない頃に、『薔薇の騎士』（ローゼンリッター）連隊のライナー・ブルームハルト大尉がわざわざフェリックスの為に張つたものである。

元々、ブルームハルトはカスパー・リンツ共々、一家が亡命して来て所謂公営住宅（身一つで転がり込んだ亡命者用の、かなり質の悪い代物である）に腰を落ち着けた時に、不慣れな彼らに家族ぐるみで手を差し伸べてくれた人間である。

当然ながら、フェリックスにとつても彼らは年の離れた兄、又は

年若い叔父さんみたいな存在である。

そんな彼らからの贈り物であるテディ・ベアの壁紙を残して行かねばならない、その事実にフェリックスはすっかり臍を曲げているのである。また、泣つているのは彼の妻も同様である（因みに、そんな奥様方の集まりの中心には、キャゼルヌ夫人が居るとか居ないとか）。

「仕方がありませんねえ、此処は『俺達の家』ですもの」ガウエインの言葉に小さく微笑み、ミッターマイヤーは出撃命令を出した。

囮として、アッテンボロー分艦隊が護衛する輸送艦五〇〇隻に、引っ掛けたのはレンネンカンプ艦隊であった。

「レンネンカンプか」

画面を見ているミッターマイヤーの目に、かなり剣呑な色が浮かぶ。

『前』の時には、色々『害悪』を振り撒いてくれた男である。僚友としては、まあ中くらいと言った感じではある。

しかし、事ヤン・ウェンリーに対する態度は軍人としても、また公人としてもとても褒められた男ではなかつた。あの『時』、レンネンカンプが皇帝陛下の言葉を遵守していれば、ヤン・ウェンリーはもう暫くは大人しくハイネセンに居た筈であつたし、あの後の戦闘や動乱は起きなかつたかもしれない。

百歩譲つて、結局ヤン・ウェンリーが行動を起こしていたとしても、もつと違う結果になつていだらう。

ふと、ミッターマイヤーは強い誘惑に駆られた。

今、彼は明確に『敵』である。今ここで『ガルガ・ファルムル』を落とてしまえば……。

「提督、何考えてらつしゃいます?」

「え?」

顔を上げると、ガウェインが呆れたように自分を見ている。

「今、すゞごく悪い顔してましたよ？ ミスター・レンネンに何か含みでもあるんですか？」

そう言われて、ミッターマイラーは頬に血が上るのを感じた。そこへ、オペレーターから敵艦隊の接近が告げられた。ミッターマイラーは頭の中の誘惑を振り切つて、分艦隊に攻撃を命じた。

レンネンカンプは、挾撃の為に艦隊を一分し、緩やかに曲線を描いて輸送艦隊を包囲しようとした。

一旦はロイエンタールを感嘆させたものの、前方に回り込もうとした側は自爆した輸送艦に巻き込まれ、混乱したところを護衛としてくつ付いていたアッテンボロー分艦隊に、そして後方から追いすがろうとした側に至っては、流体金属層の下で息を潜めていたミッターマイラー分艦隊によつて、強かどころかかなりの痛撃を食らつた。

結果として、ルツツ艦隊の救援を受けて体勢を取り戻す頃には、レンネンカンプ艦隊は半数以下に撃ち減らされたのである。

因みに、『ガルガ・ファルマル』は中破したものの生き残り、それを知つて無意識のうちに舌打ちしたミッターマイラーが居たのだが、それは艦橋でも限られた人間しか知らないことである。

そして、アレックス・キャゼルヌ命名『箱舟作戦』は、肅々と実行に移された。

『ベーオウルフ』は、乗員の七割以上が女性である事もあり、民間人女性達が多数搭乗する事となつた。

六百人の赤ちゃんとその母親達を乗せた『コリシーズ』よりはマシであると、『ベーオウルフ』の数少ない男性乗組員達は胸を撫で下ろしたらしい。

遠ざかる銀色の球体眺めていたヤン艦隊の幹部達は、所定の時刻になつてもひび割れぬその美しい姿に、誰とも無く安堵の息を吐いていた。

「さらば、イゼルローン。俺が戻つて来るまで浮氣するなよ。お前は本当に虚空の女王だ。お前ほど佳い女はいなかつた」

そう言って別れを惜しむポプランや、ポケットウイスキーのボトルを掲げるシェーンコップ、そして敬礼して遠ざかる要塞を見詰める人々の中、ミッターマイヤーは一人別の思いを噛み締めていた。

ロイエンタール。

俺は、お前を護る。

今度こそ。

その頃、奪還したイゼルローン要塞に入港したロイエンタールの許に、一葉のカードが届けられた。

それは、爆発物の調査中に艦隊事務室の一隅から発見されたもので、ロイエンタール個人宛てたものであつた。

受け取り、その文面を見たロイエンタールは、黙つて届けに来た士官を下がらせ、そしてそのカードを丁寧に軍服の胸ポケットに納めた。カードの文字は、他でもないミッターマイヤーの文字だった。

D u R e u e n t h a l ,

H o f f e n t l i c h s e h e n w i r

u n s w i e d e r .

W . M

「次は、同盟領で、だな。ミッターマイヤー」  
そう呟き、ロイエンターールは帝都へ『イゼルローン奪還』を知ら  
せるよう命じた。

かくして帝国暦四九〇年、宇宙暦七九九年一月一九日、イゼルロ  
ーンは帝国軍に占拠された。

そしてミッターマイヤーの、『終わらせない戦い』の第一幕  
の始まりでもあった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2383p/>

---

永遠は刹那のなかに 第四部

2011年4月15日13時33分発行